新元号「令和」出典考

――「梅花の宴」の二重構造――

吉海直人

【キーワード】令和・元号・万葉集・大伴旅人・大宰府・梅花

はじめに

二〇一九年四月一日、新元号が「令和」に決まったという報道が大々的に行なわれた。その報道を行なった菅官房長官（新首相）は、その後「令和おじさん」と呼ばれている。これで五月一日の徳仁（なるひと）皇太子のご即位に伴って、平成三十一年は令和元年に変更されることになった。そのため二〇一九年は、平成と令和が混在することになる。

今回の改元最大の特徴は、従来の元号が漢籍を典拠としていたのに対して、初めて日本の古典である『万葉集』から採用されたことである。因みに明治と大正は『易経』が出典であり、昭和と平成は『書経』が出典とされている。それもあって、安倍首相がテレビで「国書」を繰り返し口にしたのが耳についた。もちろん使い方が間違っているわけではない。日本で書かれたり出版された本はすべて国書だからである。とはいえ、排他的国粋主義的な見方は適当ではあるまい。日本文化は中国文化と融合して誕生しているのであるから。

しかも今回の出典は、国書とはいえ漢文で書かれた序の部分であり、必ずしも日本語（大和言葉）で書かれている個所からの引用ではなかった。もともと元号とは和語からとれないもの

であることをきちんと理解していただきたい。また歴史書ではなく初めて文学から引用されたのだから、表面的な漢字の説明だけでは物足りなさを感じてしまう。そこで『万葉集』の出典個所について、国文学の立場からもう少し詳しく論述してみたい。その上で、文学的に「令和」をどう読み取ればいいのかについて、いささか私見を述べてみたい。

予め私の主張を箇条書きにすると、次のようになる。

1、典拠となった『万葉集』が漢籍ではなく国書であること。
2、『万葉集』が歴史書・思想書ではなく歌集であること。
3、「梅花の歌」が和歌ではなく漢文で書かれた序の一部であること。
4、序が漢籍を踏まえて書かれていること、しかもその漢籍が反社会的な思想書であることはあまり報道されていない。
5、「梅花の宴」の歌が中国の「梅花篇」を踏まえていること、そこに「望京の思い」が反映していること。
6、時代背景として長屋王の変が想定されること。
7、総合的に考えると、「梅花の歌」には旅人の複雑な心境が込められていること。
8、家持の『万葉集』自体、藤原氏への対抗意識が根底に存していること。

以上のことを念頭において、「令和」について分析していきたい。

一、元号について

最初に「元号」について、簡単な基礎知識を押えておこう。そもそも元号というのは、中国発祥・由来のものなので、起源はものすごく古い時代に遡る。紀元前の前漢の武帝が「建元」という元号を創始したとされているのだから、歴史的には前漢まで遡ることになる。その中国の支配下にあった周辺の国々（含日本）は、中国の従属国（冊封国）として朝貢使を遣わし、中国のすぐれた暦と中国の元号を持ち帰っていた。元号は暦の一部であり、また支配・被支配の象徴でもあったといえる。

日本が独自の元号を使用しはじめたのは、ずっと遅れて大化の改新（六四六年）の時からだとされている（『日本書紀』による）。これによって独立国としての意識を表出していることになる。その後しばらくは断続的に用いられていたようだが、文武天皇五年（七〇一年）に「大宝」が制定されて以来、今日

まで千三百年以上も元号が用いられ続けてきた。数えてみると、新「令和」は二三二番目（北朝を加えれば二四八番目）の元号になる。この数字だけでも十分すごいことである。

その間、本家本元の中国では、辛亥革命（一九一一年）で清王朝が滅亡した際に元号も廃止されてしまった。韓国など周辺の国々（漢字文化圏）も、独立に伴って元号をやめてしまったので、現在も元号が存続しているのは、なんと日本だけとのことである。日本にしても、もし第二次世界大戦敗戦後に天皇制が廃止されていたら、おそらく元号も自動的に廃止になっていたであろう。というのも、元号は君主制（天皇制）と不即不離の関係にあるからである。

もちろん元号の廃止については、戦後の国会でも議論されていた。民主主義国家としては当然のことである。その折、日本における元号の文化的意義を熱く説いたのが、歴史学者の坂本太郎博士であった。結局、昭和五十四年（一九七九年）に元号法が制定されたことで、元号の存続が決定された。その間、宙に浮いていた「昭和」も、象徴天皇の元号としてそのまま使用されることになった。そのため日本では、西洋暦と元号（和暦）の併用が今も行なわれているわけである。不便だ、西暦だけでいいという人もいるが、元号はもはや日本固有の伝統・文化になっていることを主張しておきたい。

なお明治になって、元号の制度が変更になっていることはご存じだろうか。それ以前は、天皇の譲位とは関係なく、随意に改元することができた。幕末の孝明天皇の御代など、御在位二十一年の間に嘉永・安政・万延・文久・元治・慶応と六度も改元されている。その煩雑さもあって、明治政府は「一世一元」の詔（みことのり）を発布して、新天皇即位の時にだけ改元することに定めた。この時に本来の元号とは多少ずれが生じたことになる。その結果として、昭和が日本で一番長い元号となった（六十四年）。

平成の天皇陛下は、ご高齢だった昭和天皇を身近に御覧になられていたこともあり、八十歳を過ぎたら譲位したい旨を述べられていた。それを受けて、明治以降初めて生前譲位が行なわれることになり、皇太子（徳仁親王）の即位（一二六代）によって改元されることになったのである。それに伴って今上天皇は、譲位後は「上皇（陛下）」と称されることになる（上皇復活）。

ついでながら、平成の天皇が長い皇太子時代を経て即位され

たのは五十五歳の時であり、日本で二番目に高齢の即位とされた。今回は五十九歳なのでさらに高齢であったが、まだ一番ではない。というのも、一番は第四十九代・光仁天皇の六十一歳だからである。おそらくこの記録は、現皇嗣・秋篠宮が即位される際に更新されることになるだろう。

二、「令和」の出典について

次に新元号「令和」の意味についてわかりやすく解説しておきたい。今回初めて出典を日本の古典に求めたことについては、やはり坂本博士が生前に、そろそろ出典を日本の古典に求めてもいいのではないかと提言していたと聞いている。日本の古典といっても、聖徳太子の『十七条の憲法』や『六国史』・『勅撰漢詩集』、あるいは『古事記』など漢籍に準じた著作がたくさんあるので、元号選定の材料には事欠かなかったはずである。今回はそういった漢字ものではなく、予想外の『万葉集』が出典とされたことが一番の驚きであった。しかも最初に提出された候補からではなく、後に追加されたものから選ばれたとのことである。どうやら安倍首相は、単に国書から選ぶというだけでなく、『万葉集』への拘りがあったらしい。そのため著名な万葉学者である中西進博士の発案であることがすぐに報道された。

それもあって発表直後から、書店の文庫本『万葉集』が飛ぶように売れ、増刷が間に合わなかったとのことである（「平成」の時とは明らかに違っている）。中には『万葉集』と聞いて、「令和」を和歌の一節だと勘違いした人もいたようである。しかし前述のように、出典は決して和歌の一節ではない。そもそも「令」は和歌に馴染まない漢字であった。加えて『万葉集』には、万葉仮名で書かれた和歌だけでなく、漢文で書かれた文章も多く含まれていることを承知してもらいたい。特に巻五は、漢文が多いという特徴を有していた。

出典を含む「梅花歌三十二首幷序」はその好例といえる。次にその序について詳しく分析してみよう。冒頭部分は、

天平二年正月十三日、萃于帥老之宅、申宴会也。于時、初春令月、気淑風和、梅披鏡前之粉、蘭薫珮後之香。

（新編全集『万葉集1』40頁）

云々と漢文体で貫かれている。天平二年は七三〇年のことである。ここに出ている「帥老」は、帥（そち）（長官）として大宰府（福岡県）に赴任していた当時六十六歳（かなり老齢）の大伴旅人

のことである。その旅人の邸で「梅花の宴」が開催された。その宴会で歌われた「梅花の歌三十二首」（八一五～八四六番）の序として、歌の前に置かれた漢文こそが「令和」の出典になっているのである。なお宴会が行なわれた旅人の邸は、現在の坂本八幡宮の境内とされているが、以前行われた発掘調査では、それを裏付けるような証拠（痕跡）は見つかっていない。その他、月山東地区官跡や大宰府条坊榎社周辺なども比定地候補であるが、どれも決め手を欠いている。

残念なことに、この序の作者は記されていない。一見すると、主催者である旅人の作のように思われるが、漢文に秀でていた部下の山上憶良が代筆しているという説も強い。参考までに前掲の漢文を書き下し文にすると、

天平二年正月十三日、帥老の宅に萃まりて、宴会を申べたり。時に、初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす。

と読める。これをさらにわかりやすく現代語訳すると次のようになる。

天平二年正月十三日に、旅人の邸に集まって宴会を開いた。折しも初春のめでたい月、空気は清らかで風も穏やか、梅は鏡の前で白粉をつけた美人のように白く咲き、蘭（藤袴）は身に帯びた匂い袋のように薫っている。

ここには平和で穏やかな宴会の様子が綴られている。[1] 付け加えると、当時の梅はすべて白梅だった（紅梅は『古今集』以降に登場）。その白梅は中国から輸入された貴重なもの（漢方薬）だったので、庭園に植えて大切に守り育てられていた。日本文学における梅の初出は、『懐風藻』にある葛野王（弘文天皇の皇子）の漢詩とされている。『万葉集』に一一九首も詠まれているが、古い時代の歌には見られず、全て第三期以降に出ている。そう考えると、中国の窓口的な大宰府に梅が植えられていることも納得されるはずである。少なくとも『万葉集』の梅は、日本の花ではなく中国文化を象徴するものだったのだ。

その「梅」と対になっている植物が「蘭」である。ただし「蘭」は初春に咲く花ではない。開花は夏から秋なので、造花かレトリックでもない限り、正月に花を咲かせることはありえない。だからここは花ではなく葉の香りということで、「藤袴」のことと解釈されている。それを踏まえて「鏡前の粉」を解釈すると、鏡の前でお化粧している美人の顔のように白く、となる。これは白梅の花を、顔に塗られた白粉（＝美人）に譬えて

いるのである。有名な白楽天の『長恨歌』にも、「六宮の粉黛（ふんたい）顔色なし」とあった。

なお、『万葉集』に梅の歌が多いのは、この「梅花の宴」でまとめて三十二首（＋追和四首）も詠まれているからである。もっといえば、こんなにたくさん梅の歌が一度に詠まれているのは、非常に珍しいことだった。実は『万葉集』で初めて梅が詠まれたのはこの宴のわずか三年前なので、梅はまだ大木ではなく若木程度だったかもしれない。

しかも梅の歌は、旅人周辺の文化圏（筑紫歌壇）にまとまっているといえそうだ。山上憶良・小野老・満誓など、当時の大宰府文化圏の教養の高さがうかがえる。彼らの能力からすれば、漢詩の方がもっとスムーズに読めたかもしれない。それを和歌にしてくれたお蔭で、こうして『万葉集』に載ることができたわけであり、時を経て「令和」の出典にできたのである。

三、「令和」の意味について

前章で紹介した漢文の序の中の「初春令月、気淑風和」が、元号の出典となっている個所である。ただし一見しておわかりのように、「令和」という熟語があるわけではない。ここは単純な引用ではなく、対句になっている「令月」と「風和」から一字ずつ、しかも互い違いにピックアップして、「令和」という二字熟語を強引にこしらえていたのである（造語）。こんな芸当は普通の国文学者には到底できそうもない。当然、現在市販されている万葉集の解説本を見ても、「令月」の説明はあっても、「令和」の説明など一言も書かれていない。もともとそんな言葉は存在しないのだから、以前は「令和」に注目することさえできなかった。だから慌てて『万葉集』の本を購入しても、期待した説明など出ているはずはあるまい。

このことを押えた上で、漢字の説明に移りたい。まず「令」は意味用法の多い漢字である。この場合は「命令・法律・長官・使役」などの意味ではなく、「立派な・すばらしい・めでたい・良い」という意味で用いられている。また「和」は「平和・調和・和睦」というより、「なごやか・おだやか・やわらぐ」の意味である。だからたとえ『類聚国史』に「令和之」（「曲宴」）という使役の古い例が認められるとしても、明らかに用法が異なるのだから、それを出典の一つとすべきではあるまい。というより、「令和」を熟語として考えるとうまくいかないので、独立した漢字「令」と「和」の集合体と見る方がわ

かりやすい。「令和」は実のところ説明しにくい言葉なのである。

また序は、本来漢詩に付けられるものであった。それを日本で和歌に援用しているのだから、必然的に漢詩の序の形式や構成・文体・用字も模倣している。見本を参照して序を書いているようなものだから、序の内容・文体については類型化していても仕方ないのである。特に張衡（ちょうこう）作「帰田賦」の「仲春令月、時和気清」（文選）や、晋の王羲之の『蘭亭序』（『蘭亭集』の序）の「是日也、天朗気清、恵風和暢」などが手本として下敷きにされている。(2)

ただし蘭亭の宴は曲水の宴だったので、「梅花の宴」とは内実が異なっていた。それに対して「帰田賦」には「仲春令月、時和気清（すむ）」とあって「令・和」が揃って使われているだけでなく、八字中の五字が一致していることから、序はこれを意識して書いていると見て間違いあるまい（出典ということもできる）。もちろん漢籍を引用しているからといって、純粋な和文ではないという非難はあたらない。当時は漢籍を踏まえることこそが教養ある文章とされていたからである。

ついでながらこれらの先行作品は、中国では反社会的な思想が盛り込まれているとされている。当然これらを踏まえている「梅花の宴」にもそのことはあてはまる。もしそうなら、表層的な意味を知るだけでは鑑賞したことにはなるまい。そういった複雑さが文学の担っている役割でもあるのだ。そして「令和」も例外ではなかった（後述）。

なお「令月」の「月」は、空に照っている月ではなく年月の「月」なので、きれいな月など空に出てはいない。めでたいのはあくまで正月（初春）だからである。この「令月」は、『和漢朗詠集』や『宴曲集』に「嘉辰（かしん）令月」（おめでたい月日）の例として用いられており、正月の褒め言葉として機能している。それに対して「帰田賦」の「令月」は「仲春」つまり二月のことであるから、序とは「令月」の意味が明らかに異なっている。また「和」にしても、「帰田賦」が「時和」（時和し）であるのに対して、『万葉集』は「風和」（風和らぎ）なので、これも用法が違っている。だから漢籍からそのまま採用したというのもあてはまらない。そこに差違と工夫があることを認めるべきであろう。というより、本来〈引用〉というのはそういうものなのだ。

いずれにしても、「令」は今回初めて元号に用いられた漢字

であった。ラ行の発音も何百年ぶりである。一方の「和」は「昭和」に続いて今回で二十回目である。ということで「令和」には、「めでたい・おだやか」な世の中になってほしいという願いが込められているのである。かつての改元は国に災いが生じた時、その災いを祓いさるという願いをこめて行なわれた。今回の改元は一世一元なのでそれとは事情が異なるが、確かに平成には東北大震災など災害が多かった。人々が新しい令和の時代へ期待を寄せるのも無理からぬことである。(3)

繰り返すことになるが、『万葉集』から採用された「令和」は、国書を典拠としているとはいえ、分厚い中国文化に依存して成り立っていることを理解していただきたい。日本は決して独自に発展したのではなく、東アジア文化圏の一員としての歴史を刻んでいたのである。

四、大伴旅人と吉田宜のやりとり

先に「令和」の出典となった『万葉集』の「梅花の宴」歌の序について解説したが、どうもそれだけでは説明として不十分のようである。というのも、序はもっと大きな括りの中に含まれるものだからである。そもそも文学というのは、一部を切り取った時の解釈と、作品全体から見た解釈では異なる場合がある。だからここも巨視的に見ておく必要がありそうだ。一面的に見ないのが国文学の鉄則でもある。

まず『万葉集』巻五の目録（目次）を見ると、

大宰帥大伴旅人卿の宅にして宴する梅花の歌三十二首并せて序（八一五～八四六番）

に続いて、

故郷を思ふ歌二首（八四七～八四八番）

後に梅花の歌に追和する四首（八四九～八五二番）

が附随しており、この三項目で一つのまとまりになっていることがわかる。さらに続いて、

松浦川に遊ぶ贈答歌二首并せて序（八五三～八五四番）

蓬客等の更に贈る歌三首（八五五～八五七番）

娘等が更に報(こた)ふる歌三首（八五八～八六〇番）

帥大伴卿の追和する歌三首（八六一～八六三番）

が掲載されている。内容は「梅花の宴」歌とは別なので無関係のように思えるが、どうやらこれだけのものが一括され、大伴旅人から都にいる吉田連宜(よろし)（帰化人・医師）に私信を添えて送り届けられているようだ（四月六日）。そのことは、これに

続いて旅人の歌に応えた宜の返歌が続いていることからわかる。

吉田連宜、梅花の歌に和ふる一首（八六四番）
吉田連宜、松浦の仙媛に和ふる一首（八六五番）
吉田連宜、君を思ふこと未だ尽きず、重ねて題す歌二首
（八六六～八六七番）

ということで、「令和」の背景を考えるためには、該当する序の一部だけでなく、これだけのものを資料として総合的に考える必要がある。そこでまず目にとまったのが、目録の二番目にある「故郷を思ふ歌」であった。この「故郷」は旅人の生れ故郷という意味ではなく、平城京（都）のことを意味している。そのことは歌の中に「都見ば」（八四八番）と詠まれていることからも察せられる。

それと関連することが宜の返書（七月十日）の中に、

辺城に羈旅し、古旧を懐ひて志を傷ましめ、年矢停まらず、平生を憶ひて涙を落とす。

と書かれている。これをわかりやすく現代語訳すると、

僻地にある大宰府に旅寝し、過去を懐かしんでは心を痛め、年月はさっさと去っていき、若かりし頃を偲んでは涙を流している。

となる。ここで旅人のいる大宰府は、都にいる宜からは「辺城」（僻地）ととらえられていたことになる（中国風に解釈すれば左遷に等しい）。続く「古旧を懐ひて」には、二年前に亡くなった旅人の妻（大伴郎女）に対する悲しみが暗示されていた。

どうやら旅人から宜に送られた私信には、明るい「梅花の宴」歌には表出されていない私的な悲しみ（本心）が吐露されていたようである。そこに文学的脚色もあっただろうが、少なくとも陽気な「梅花の宴」とは異なる旅人の悲痛な望京の念が綴られていたことが、この宜の返書から察せられる。そもそも序の末尾に「落梅の篇を紀せ」とあった「落梅篇」とは、中国の「梅花落」を踏まえているとされている。その「梅花落」は、梅の落花にことよせて望京の思いを述べたものであった。そうなると大宰府における旅人の「梅花の宴」には、表裏二重の思いが託されていることを読み取らなければなるまい。[4]「令和」にもそれは反映されてしかるべきであろう。

五、大伴旅人の文学的虚構

それだけでなく、まだ考えるべきことが残っている。それは

旅人あるいは「梅花の宴」自体が内包する文学的虚構ということである。そもそもこの「梅花の宴」は、満開の梅の花の元で催されたように見えるが、主の旅人は、

我が園に梅の花散るひさかたの天(あめ)より雪の流れくるかも（八二二番）

とあって、表向き「園梅」でありながら、内実は「梅花落」にふさわしく散る花を詠じている。

なお梅の花が散るのを降雪に喩えているのは、梅が白梅だからできることである。ただそれに続く大伴百代（大伴一族の一人）を見ると、

梅の花散らくはいづくしかすがにこの城(き)の山に雪は降りつつ（八二三番）

と詠じており、散る花どころかまだ梅は咲いておらず、大野山には雪が降っていると現実を暴露している（園梅にふさわしくない）。もちろんこれも雪を白梅に見立てたレトリックとも考えられるが、新編全集の頭注に、

現在、大宰府周辺の梅の満開は普通三月上旬。太陽暦の二月八日に当る天平二年（七三〇）正月十三日に落梅が見られた可能性は少ない。（43頁）

とあって、大宰府の梅の満開はもっと遅い（新暦三月初旬頃）ことが指摘されている。(5) そうなると旅人にしても、決して眼前に咲く梅花を詠じているわけではなかった可能性がある。

また歌が詠まれた場所も旅人の梅園だけでなく、宿の梅（八一八番）・野の梅（八三九番）・岡辺の梅（八三八番）と不統一になっている。もっと詳しく歌の内容を分析すると、山上憶良の歌には「ひとり見つつや」（八一八番）とあって、独りで自邸の梅を見て詠んでいるし、小野国堅は「妹が家(へ)に」（八四四番）と恋人の家の梅を詠じている。また「我が家の園」（八一六番小野老・八三七番志紀大道・八四一番高向老）・「我が園」（八一六番阿倍息島）・「我が宿」（八二六番史部大原・八四二番番高氏海人）と自邸の梅を詠じている歌も少なくない。これについて新編全集の八四二番注には、

この「梅花歌三十二首」の中には旅人邸で詠んだと考えられない歌が幾つか混じっている。殊に大宰府から遠い辺地の歌には、旅人から「園中梅」などの題で歌を詠み送れと言われて作ったものもあると思われる。（48頁）

と記されている。あるいは憶良などの代作も含まれるかもしれない。

しかもこういった歌は宴会の楽しさには触れておらず、旅人邸の「梅花の宴」席の雰囲気とずれているように思えてならない。あるいは妻を亡くした旅人の心を代弁して詠じているのだろうか。それとも眼前の梅ではなく、平城京の我が家の梅を想起して詠じているのであろうか。大胆にいえば、旅人の家の梅など誰も見ていない（詠じていない）のではないだろうか（宴会で歌われたのではない可能性もある）。

たとえ梅が咲いていなくても、たとえ宴会が開かれていなくても、そして誰も（旅人でさえも）旅人邸の梅を見ていなくても、梅花の歌宴は文学・文章として成立させられる。つまり、この宴会自体が文学的虚構であり、必ずしも宴会当日に三十二人が集っていなくてもかまわないのだ。「園梅」という題詠に適った和歌を読み、それが旅人のもとに届けられ、それを紙面で構成した虚構の宴会・虚構の歌会である可能性も十分考えられる。全体をまとめたのは、これも憶良がふさわしいかもしれない。

繰り返すことになるが、「梅花篇」というのは辺境の梅を見て都の梅を思いやるものだった。当然、都から来ている旅人もそれを意識しているはずである。では旅人が何故そんなことをしたのかといえば、それは私的な妻の死の悲しみなどでは説明できそうもない。もっと大きな事件が都で起こっていることと無縁ではなさそうだ、と考えてみたくなる。そこでこの「梅花の宴」の直前（天平元年）、旅人が都にいる藤原房前（ふさきき）に桐の大和琴を贈っていることに注目したい（八一〇～八一二番）。何故旅人は唐突に房前に贈り物をしているのだろうか。

試みに歴史年表を紐解いてみると、天平元年（七二九年）の二月に、忌まわしい長屋王の変が勃発していることがわかった。これは不比等の娘光明子の立后に反対する長屋王の力を恐れた藤原四兄弟が、長屋王を無実の罪で処罰（排斥）した事件である。その長屋王と旅人は親しい間柄だった。もしこの時、軍事力を有する旅人が都にいたらどうなっていただろうか。そう考えると旅人が帥に任ぜられたのは、長屋王排斥を目論む藤原氏の深慮遠謀だったとも読める。こうして光明子は初の藤原氏出身の后となった。

遠い大宰府の地で長屋王の自害を聞いた旅人は、一体何を思ったことだろう。こうなった以上、大伴一族に類が及ばないようにしたい、と考えたとしても不思議はあるまい。大和琴の贈与は、旅人に反抗心がないことを藤原氏に表明するために行

なわれたとも考えられる。そういった都の大事件を背景にしつつ、大宰府では何事もなかったかのように、「梅花の宴」が表向きのどかに都を意識しつつ開催されたと記録されているのである。

ただしここに名を連ねているのは大宰府や筑前・筑後・豊後のみならず、壱岐守・対馬目・大隅目・薩摩目など九州全域（九国二島）の主要な役人達である。[6] 地方における私的な宴会としては、規模が大きすぎないだろうか。これは宴会の開催自体が何かをアピールしているようにも読める。思うに、彼らが筑紫歌壇の一員として旅人主催の宴会に参加しているということは、旅人が九州全域を掌握していることの象徴でもあった。それは八年前（七二〇年）に遡って、旅人が隼人の乱制圧のため征隼人持節大将軍として九州に赴任していたことからも察せられる。旅人主催の宴会に、ほぼ九州全土の役人が終結しているということは、旅人の政治力・軍事力を表象していることになる。これこそ宴会の裏の意義であろう。ここにも「梅花の宴」の二重構造が暗示されていたのだ。

六、『万葉集』編纂の意図

天平二年十一月、旅人は大納言に任ぜられて都に戻っている。それも束の間、翌天平三年七月に病死しているが（享年六十七）、それでも都で亡くなったのは本望であろう。ここまで視野を拡げることで、ようやく「令和」の複雑さというか、表と裏の内実（現実と希望）がほの見えてくる。それこそ元号を『万葉集』（文学）から採用したことの意義であり、「令和」に込められた祈りであろう。「令和」を安易に「大和しうるはし」と解釈することには賛成しかねる。かえって本質から遠ざかると思うからである。

ついでに大伴旅人の文学的業績を調べてみると、ほぼ大宰府に集約されていることがわかった。都を離れて大宰府に赴任している時に、旅人は都を意識して多くの和歌を詠んでいるのである（酒の歌も多い）。旅人の子・家持も同様であった。というのも、越中（富山県）に赴任していた五年間に二二三首もの歌を詠じている（『万葉集』に収録されている）からである。それは『万葉集』家持所収歌の半分近くになる。その折に、筑紫歌壇を模した越中歌壇が形成されたのであろう。そして因幡

（鳥取県）赴任中に詠んだ「あらたしき」歌が『万葉集』最後の歌であり、知られている限り家持最後の歌でもあった。それ以降、亡くなるまでに詠じた歌の資料は見当たらない。

次に家持による『万葉集』編纂の意図を考えてみると、もちろん秀歌撰としての要素も否定できないが、藤原氏による他氏排斥が激化する中で、滅びゆく大伴氏の最後の抵抗というか、藤原氏にはできない歌人としての文化力を高らかに謳歌しているように思われる。その証拠に、『万葉集』は所収歌四五〇〇首に余る最古かつ最大級の歌集であった。加えて編者・家持の歌は長歌を含めて四八〇首程も収められている（全体の一割強）。一人で百首以上撰ばれているのは家持ただ一人である。これは巻十七から巻二十までが家持の歌日記をもとにしているからでもあろう。

それのみならず大伴坂上女郎（八十四首）・大伴旅人（七十八首）や大伴池主（二十九首）などの大伴氏の歌が精力的に集められているし、古代氏族（柿本人麻呂九十四首・山上憶良約八十首・山部赤人五十首）以下、渡来人・作者不明の地方の歌などが意図的に集大成されている（もともと作者不詳が半数を占めている）。また漢文の序や万葉仮名表記など、中国を強く意識した体裁になっている。それは歌集のレベルの高さを誇示しているからであろう。逆に藤原氏の歌がほとんどないことも、隠れた『万葉集』の特徴の一つといえそうだ。たとえ政治では敗北しても、和歌（文化）では大伴氏が全国を掌握し藤原氏を凌駕しているのである。

ということで、雄略天皇の「籠もよみ籠もち」歌から始まっている『万葉集』は、和歌によって大和朝廷の歴史を私的な大伴氏の視点から綴っている文芸作品とも読める（大伴歌集）。それは大伴氏の滅びの歴史・文学でもあるのだが、家持は誇り高く「あらたしき」という寿（ことほ）ぎの歌で『万葉集』を閉じている（これも形式を踏襲しているのであろう）。

最後の歌は、奇しくも橘諸兄が亡くなった二年後の天平宝字三年（七五九年）のものだった。そこには日本の平和、天皇家の安泰、そして大伴家の存続への祈りが籠められている(7)。面白いことに、旅人も「梅花の宴」で降雪に平和を願っていた。その願いもむなしく大伴氏は没落してしまうが、家持の遺した『万葉集』は今も輝きを失っていない。それこそが文学の力（魅力）なのである。

この家持の思いを強く受け止めたのが、平安時代の菅原道真

と紀貫之ではないだろうか。旅人と同じく大宰府に左遷された道真は、和歌とその漢詩訳を載せた『新撰万葉集』を編纂している。そこに漢詩が含まれるのは、『万葉集』が中国文学の影響をたっぷり受けていることを見通しているからである。

貫之にしても、日本初の勅撰和歌集である『古今集』を、当初『続万葉集』と名付けようとしていた。何より貫之は家持を真似て、自身の歌を『古今集』全体の一割も撰入している。もちろん親戚の友則をはじめとして、紀氏のみならず在原氏などの没落氏族の歌もたくさん含まれている（紀氏歌集）。真名序（紀淑望）も仮名序も紀氏が独占していた。貫之は公的な勅撰集に私的な紀氏の和歌を詰め込んでいるのである。それでも『古今集』の規模は、『万葉集』の四分の一でしかないのだから、いかに『万葉集』が巨大であるかがわかる。

ここでもう一つ、看過してはならないことがある。それは『万葉集』は漢字表記を選び、『古今集』は仮名表記を選んでいることである。漢字表記を選んだからこそ、令和の出典たりえたわけだが、要するに漢字には権威付けという側面があった。対中国を意識しても、漢字で表記しなければならなかったのだ。

それに対して貫之は、そういった権威付けよりも、仮名表記による和歌技巧の便利さを選び取ったことになる。『古今集』になって和歌の技巧が広がったというより、仮名表記にしたからこそ和歌の技巧が深化（進化）したのである。貫之は対中国よりも日本の和歌の充実をこそ望んだことになる。それが『万葉集』との大きな違いなのだ。

おわりに

そういえば大伴旅人主催の「梅花の宴」最初の歌は、当時大宰の大弐（次官）であった紀男人の、

正月立ち春の来らばかくしこそ梅を招きつつ楽しき終へも

（八一五番）

歌であった。これなど巻頭歌ということで形式的に、

新しき年の始めにかくしこそ千年をかねて楽しきを積め

（続日本紀一四・琴歌譜・催馬楽）

を踏襲していることがわかる。

その紀氏にしても大伴氏同様に武力を有していたことで、藤原氏の他氏排斥によって没落の道を辿っていった。紀氏最後の夢は、文徳天皇の第一皇子・惟喬親王（母は紀名虎の娘静子）の立太子だったが、藤原良房によって第四皇子・惟仁親王（母

は良房の娘明子）が立太子することであっけなく敗北してしまう。その惟喬親王の逸話を載せている『伊勢物語』の作者として、紀貫之が有力視されているのである。みやびに描かれた『伊勢物語』もそして『古今集』も、間違いなく滅びの文学の一つだったのだ。その意味では家持の思いが貫之に継承されていることになる。

『古今集』歌人としての藤原氏としては、摂関家の血筋からはずれた藤原敏行が活躍している。しかし撰者に藤原氏は一人も含まれていない。藤原氏が政権のみならず和歌の世界をリードするようになるのは、藤原公任が『拾遺抄』の撰者となって以降のことであった。その公任が『三十六人撰』（秀歌撰）に人麿・赤人・家持の三人を撰入させたこと、さらに藤原俊成によって家持が再評価されたことで、歌人としての家持は人麿・赤人に匹敵する地位を獲得する。百人一首に家持が撰入されたのも、そういった下地があってのことだった。見方によっては、勅撰八代集にしても百人一首にしても、藤原氏が政治に続いて和歌を手中に収める過程を描いた歴史書としても読めそうだ。

「令和」という時代になって、『万葉集』のみならず日本の古典や文化が総合的に見直されることを心から願っている。この「令和」を、日本文化復活の契機にできないものだろうか。「平成」の折にこんな感情は抱かなかったが、「令和」には何かしら期待できそうなので、古典文学見直しの期待をこめて私見をまとめてみた次第である。

〔注〕

（1）益田勝実氏はこの宴会について、

> 九国二島の各地から集ってきた今年の朝集使たちは、〈中略〉正月のはじめ「遠の朝廷」と呼ばれる府の政庁で拝賀を行ない、帥旅人から饗を給うたはずである。今日はその公式の宴と変って、旅人が私邸に招いての宴であった。（134頁）

と分析しておられる（「鄙に放たれた貴族」『新装版火山列島の思想』〈筑摩書房〉一九八三年二月）。

（2）それとは別に、『蘭亭序』の「淡然自放、快然自足」（かいぜんとしてみずからたる）が梅花の序に「快然として自ら足り、老の将に至らむことを知らず」とそのまま用いられているので、『蘭亭序』を踏まえている（お手本にしている）ことは否定できない。しかもそれは梅花の序の欠点ではなく、教養の高さを象徴するもの（プラス要素）と見たい。

（3）即位の年、東日本は台風による甚大な被害を受けた。また沖

縄では首里城が消失した。令和二年には未曾有の新型コロナウイルス感染が日本中に蔓延している。東京オリンピックも延期になった。もうそろそろ終息に向かって、良いことが続いてほしいと願うばかりである。

（4）益田勝実氏「鄙に放たれた貴族」『新装版火山列島の思想』参照。益田氏は「旅人」という名称が宿命の旅人の喩えであるとされ、だからこそ都を恋ると説く。そして最期は都を越え、氏族のふるさと、妻の眠る墓へと旅立ったとしておられる。

（5）新編全集の八二三番注には、

この一首を除けば皆、梅の花が満開だとか落花盛んとかいい、また柳も青み鶯も鳴いているなどといって、序に記したのと同じような早春の景を詠んだものである。その中でこの歌だけが「梅の花が散っているとはどのことですか。裏山では雪が降っていますのに」と歌っている。おそらく、百代は旅人と同族であり、また日頃心安く接している遠慮なさから真相をあばいていたのであろう。この一首によって、宴そのものが文学的虚構の産物である可能性が大きいことが知られる。（43頁）

と興味深いことが述べられている。ただしこれ以外の歌からもそのことは読み取れる。これを看過してはなるまい。

（6）新大系の脚注には、「参加しなかったのは、豊前、肥前、肥後、日向の四国」（『万葉集一』438頁）とある。なお新大系は宴に参加した三十二名の歌としている点、私見とは考え方が異なっている。なおこの宴が行われて十年後に、大伴書持が追和した歌が六首（三九〇一～三九〇六）ある。また家持も二十年後に一首（四一七四）追和している。家持は父旅人の梅花の宴を『万葉集』に詳細に残そうとしているようである。

（7）そもそも聖武天皇が大仏建立を発願されたのは、当時天然痘が大流行していたからである。その猛威は藤原氏にも及んでおり。天平九年（七三七年）には藤原四兄弟が揃って病死しているのみならず、公卿の三分の一が亡くなっている。その感染は新型コロナウイルスと同様、遣唐使や遣新羅使が外国（中国・朝鮮）から持ち帰ったと考えられている。日本にとっての国際化には、大昔から伝染病の持ち込みといったマイナス要素も含まれていたことを忘れてはなるまい。